

## 生徒の語彙力の向上に関する実践

－生徒の単語との出会いの回数を増やし、単語の定着を図る－

遠隔授業配信センター 主幹教諭 上田 妙

### 1 はじめに

新学習指導要領では、中学校までの学習対象となる語彙数はこれまでの1200語程度から1600～1800語程度と大幅に増える。高等学校ではさらに1800～2500語程度が加わり、小学校の学習対象語600～700語程度（※小学校の時点では定着は求められていない）を含めると、4000～5000語程度の語彙が学習対象となり、今後、語彙指導について英語科教員として改めて考える必要があると考えた。一方、これまでの語彙研究においては、望月他（2003）は「読みながらある語に6回以上出会うと学習できる可能性が高い。語彙知識が少ない学習者ほど出会う回数が多いとその語を習得できない。」と述べており、教科書を普通に読ませても新出語が習得されることは期待できず、未定着の単語について何度も出会わせる工夫を考える必要がある。また、新学習指導要領ではCommon European Framework of Reference for Languages（外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠：略称CEFR）を参考に目標が設定されており、大学入学共通テストの試行調査等においても各大問につきCEFRの等級（A1～B1）が示されている。これは、今後の教材作成等を含めた英語の指導において、英語科教員の指針の一つとなるものである。CEFRそのものは「言語学習者がコミュニケーションのために言語を使うには何を学ばねばならないのか、効果的に行動できるようになるためにどんな知識やスキルを発展させねばならないのか」について述べた国際的な基準であり、語彙に特化したものではないが、生徒の段階的な英語力の伸長を考えるうえでは、CEFR等級別の語彙についても考慮しながら指導する必要があると考える。これらを踏まえ、授業を行っている高校1年生の受容語彙（読んで意味の分かる語）を増やすことを第一の目標に1年間の取組を行うことにした。

### 2 実践の内容・方法

#### (1) 多くの英文を読むことにより語彙を増やす取組

##### ア 短文の多読

フリーのオンラインメールマガジンや他の教科書の英文等から、ほぼ毎日100～150語程度の英文を読んでもらうことを宿題として課した。多くの英文を読むことにより、知らない単語を辞書で調べたり、文脈の中で単語の意味を理解したりすることで、より定着につながると考えた。

##### イ 様々なジャンルの文に触れさせる

使用教科書であるELEMENT（啓林館）は比較的難易度の高い教科書であり、豊富なトピックが魅力である。そのトピックに関連付けて、例えばLesson5のUmamiでは、食が有名な訪れたい国ランキングやその国の人気料理の紹介、日本料理の調理法の書かれた英文を素早く読ませ何の料理なのか答えるクイズを行ったり、Lesson6のThe Story of PlayPumpsでは国連のHPから世界的な問題に関する短い概要文を読ませたりして、様々な単語に出会う回数を増やし、数年後の定着を目指して指導を行った。

##### ウ 夏季・冬季休業中の課題

少人数で行われる遠隔授業のメリットを生かし、長期休業中には、手持ちの高校生新聞や英語で書かれた漫画、Step Ladderシリーズなどの多読用の平易な英語で書かれた書籍などから、自分の好みのものを一つ選び読んでもらうことにした。英語に対する興味を高め、最終的には英語を様々な日常の場面の中で使用する学習者になってほしいとのねらいもあった。

#### (2) 繰り返すことにより単語の定着を図る取組

##### ア CEFR 等級 A1 レベルの単語の定着

年度当初に CEFR 等級の最も基本的な A1 レベルの単語の認知度について調査を行った。単語リストの中には、日本では頻度が高くない単語や、複数の品詞を取る単語等も存在し、調査方法を簡易なものとするため、調査の対象語彙は実際の 1165 語から 1057 語に減らすこととした。その結果、特に 428 語について生徒の認知度が不十分であると判断した。授業を進めていく中での定着も期待し、その 428 語について 9 月にもう一度調査を行い、その中で生徒が「意味が分からない」としていた 242 語について、音声等も含め冬季休業前に指導した。

#### イ 教科書の新出単語等の複数回の指導

新出単語については予習として辞書で調べさせ、授業で一度確認したうえ、さらに毎時間その時間に扱う単語を電子黒板でフラッシュカード（音声付）等を利用して確認した。遠隔授業では電子黒板の使用が通常なので語の提示や確認が便利である。また復習として 1 学期、2 学期の新出単語を冬季休業の課題として与え、春季休業の課題でさらに定着を図る予定である。

### 3 実践の成果

生徒は短文を読む課題については、比較的熱心に取り組んだが、多読用の書籍については、「難しい」という理由で、「楽しんで読んでみる」ということには至らなかった。

CEFR の A1 レベル単語については、取り出して指導した 242 語のうち、1 月末の調査で例文を与えたうえで意味が分かった単語は平均で 57% であった。例文の音読等を通して指導している際は各単語の意味を理解しているように思えたが、やはり定着となると、さらに多くの英語の量に触れる必要があると思われる。教科書の難易度が比較的高く、まだ習得していない難易度の低い単語に注目する機会が少ないことも要因の一つではないかと考える。また、教科書の新出単語の定着については、2 学期までに学習した主なものを抜粋して、生徒に予告なしでの確認テストを行った。これは例文に合う単語を選択する形式で行ったが、平均正解率が約 45% しかなく全体的には定着が見られなかった。調査方法についてもっときちんと検討すべきであった。また、生徒の学習方法等についても確認し、適切な方法や学習方略を指導する必要があると考える。

### 4 課題及び今後の取組

そもそも何をもって語彙と捉えるのかということから難しい問題はあるが、Nation(2009)は、「意味にフォーカスしたインプット(meaning-focused input)では、言語の熟達度を上げる方法としてリーディングは行われるべきで、英文の 98% の単語の意味をカバーしておくべきである。」と述べている。98% とまでいかなくとも、未知語を推測して読むことには限界があり、あらゆる言語活動や練習を通しての語彙の定着は大きな課題である。今後、新教育課程における教科書の選定にあたっては、生徒の思考力・判断力・表現力を伸ばす授業が行いやすいかなどの視点に加えて、使用語彙についても検討していきたい。また、今年度は音声面での指導が不十分であった。遠隔授業では破擦音など発音の細かい部分が聞き取りにくいいため、特に初期の音声指導では対面授業を有効に活用して強化を図りたい。さらに、各レッスンにおいてライティングやスピーキングも行ったが、十分とは言い難い。アウトプット活動は単語の定着とも大きく関係があり、一層充実させなければならない。

最後に、英語から遠く離れている日本語話者の我々が「CEFR B1 レベルの英語力に到達するためには英語に触れる時間が最低でも 2500 時間と示唆されている」(坪谷, 2017) が、英語授業だけでは到底そのレベルには到達できない。学校全体の取組や指導が今後ますます重要となると考える。

#### 【参考・引用文献】

- 望月正道・相澤一美・投野由紀夫 (2003) : 英語語彙の指導マニュアル (大修館書店) pp95-96  
Nation, I. S. P. (2009) : Teaching ESL/EFL reading and writing (Routledge) p6  
坪谷ニューエル郁子 (2017) : Opinion. The Japan Times, 2017 年 10 月 29 日